二ツ宮と氷川神社

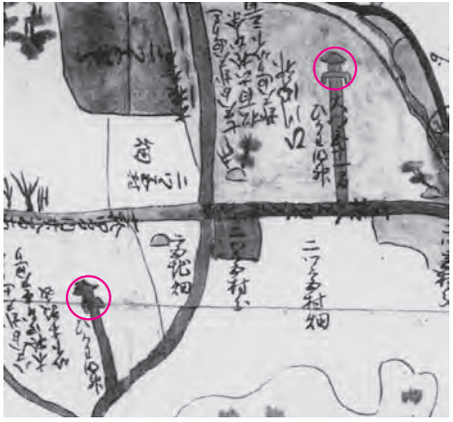
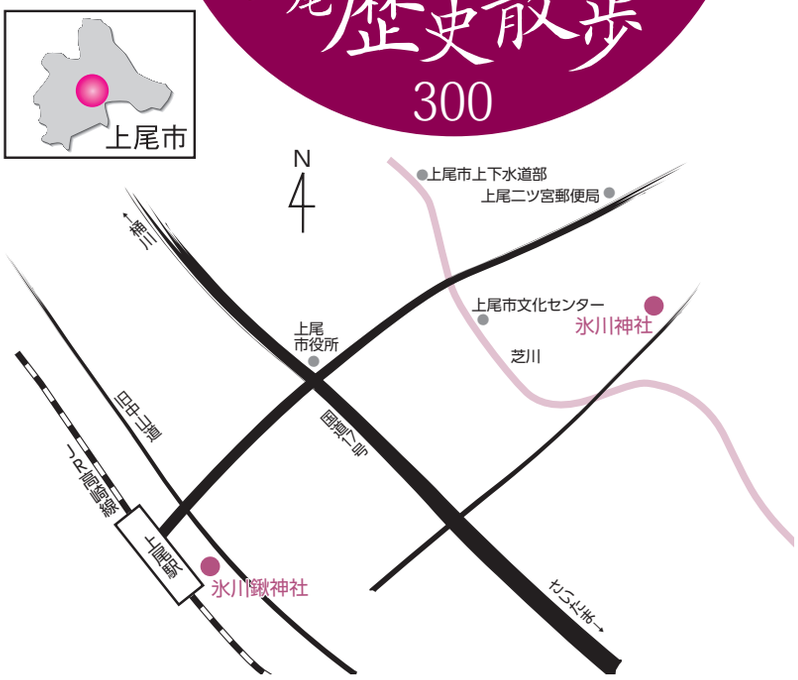


写真1　二つのお宮が描かれた絵図　右上が男体社、左下が女体社

写真2　二ツ宮氷川神社本殿彫刻（市指定文化財）



JR上尾駅から東に進み、国道17号と市役所本庁舎を通り過ぎて、さらに900メートルほど進むと、左手に上尾二ツ宮郵便局がある。この付近は古くから「二ツ宮」と呼ばれている。郵便局からさらに南東300メートルほどの所に鎮座する氷川神社には、かつて二つのお宮があり、それに由来してこの地が二ツ宮と呼ばれるようになったという。

江戸時代後期に編さんされた『新編武蔵風土記稿』によると「男体女体の両社にて、間を道をへだてならびたてり」とある。この記述にあるとおり、もともとは男体社と女体社の両社からなり、男体社は現在の社殿がある所に、女体社は南側を通る鎌倉街道を隔てた南東側（現在の三井金属鉱業の辺り）にあったといわれている。氷川神社の祭祀は、古くから水と関わりが深く、二ツ宮の氷川神社でも境内にある湧水地で、大正時代末まで雨乞いが行われていたといわれている。

なお、延宝6（1678）年に描かれた原市村と上尾村の村境を示した絵図（矢部家文書）には、「ひかわ明神」や「ひ川明神」（**写真1**）と、文化3（1806）年の『中山道文間延絵図（東京国立博物館所蔵）』の上尾宿部分では「上尾村氷川大明神」という注記とともに描かれ、当地を代表する神社であったことが分かる。

明治6年に男体社・女体社のいずれも氷川社として村社になったが、明治40年代になると、政府によって全国的に進められた神社合祀政策に伴い、無格社であった上尾宿の鍬大神宮を村社に格上げするために、女体社が合祀されることになった。女体社が合祀された鍬大神宮は、氷川鍬神社と社名を改め、村社となった。その後、御神体が移動され空宮になっていた女体社の社殿は、上尾宿の愛宕神社が譲り受けて本殿とし、二ツ宮には氷川社が一つとなって、現在に至っている。

また本殿には、市指定文化財でもある優れた彫刻が施されている（**写真2**）。中国の故事を表したもので、軒下の組子（斗栱）の間にも彫刻が施され、本殿を支える下部の肘木は全て透かし彫りされている。御神鏡台裏に「安政二乙卯孟春」（1855年）とあることや、各部分に透かし彫りを施す建築様式から、江戸時代末期の建立と考えられている。

（上尾市生涯学習課）

コラム column　氷川鍬神社の縁起

氷川鍬神社は上尾宿の総鎮守とされ、合祀する以前、江戸時代には鍬大(太)神宮や太神宮と呼ばれた。神社の創始は、童子が警護する台車に載せた御神体の入った櫃を、中山道の街道筋の人々が「鍬踊り」を踊りながら宿場から宿場へ送り継ぎ、最終的に上尾宿に鎮座したので祀ったという伝承がある。『新編武蔵風土記稿』が、簡単に伝承を伝えている他『武蔵国足立郡上尾御鍬太神宮略由来』（小川家文書）には、詳細に由来が記されている。後者の由来には、創始の伝承の他にも、天和二（1681）年の上尾宿大火で、鍬大神宮の社殿が灰燼と化した際、御神体である黄金の神幣（御幣）は大杉の高い場所にあって助かり、光を放っていたという伝説なども附随されている。

毎年7月に行われる浅間塚の初山行事や上尾夏祭りなど、多くの人々で賑わう様子は、江戸時代より崇敬を集めてきた氷川鍬神社の盛況ぶりを思わせる（**写真3**）。

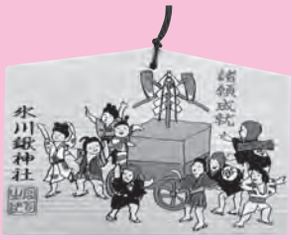


写真3　創建由来の一場面を描いた小絵馬